2016・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

38号

2016・7-2016・11

◉特集◉

三八協（さんぱちきょう）が紙芝居を作ると

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

直江津＝祇園祭

特別編 国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける

安寿と厨子王に見る直江の津

湊町・直江津―安寿と厨子王フォーラム

番外編 歴史は「今日」への手紙

やさしく解説 いまさら聞けない 真田の歴史

直江津＝直江津祇園祭

丸山岳人

夜の荒川　神輿が下る　川は万燈の迎え船
祇園囃子の笛や太鼓で　夜が明ける

ご存じ、直江津小唄の四番。私の直江津の歌といえば、やはりこの唄。私の大好きなお祭り＝直江津祇園祭（以下祇園祭）を表しているからだ。

今年も、もう少しで、祇園祭がやってくる。直江津市本町四丁目（四ツ屋区）で生まれ育った私。幼稚園に入ったころから町内の屋台（山車）の綱を引き、小学校四年からは大人に交じって太鼓をはたき、高校生になったら、七月二八日の町内神輿巡行で八坂様の御神輿を担ぎ、祭りの準備では、町内の先輩方々と屋台を組み立てたり、屋台小屋を作ったり。町内屋台運行では、（今ではＮＧかもしれないが）祝儀係で走り回ったり、三〇歳で、町内振興会三役を仰せつかり、四〇歳で、町内代表として直江津地区連合青年会役員となり、四〇歳で、周りに支えられながら、同会会長も務め…、と、祭りに参加して、かれこれ半世紀近く。

このエッセイの執筆を引き受けたとき、「わたしの直江津」って何？　と自問自答。結局のところ、「わたしの直江津」は「直江津祇園祭」であり、祇園祭を抜きにしてこれまでの人生を語れず、わたし個人も語れず。

就職などで直江津を離れた人も祇園祭には帰って来る――という話をよく聞く。小生も、その中の一人だった。学生時代は夏休みということもあり、気兼ねなく帰省し、祇園祭に参加。祭りが終わって後片付けにも加わって、祭り期間以外でも祇園祭を楽しんだ。

壁にぶつかったのは新卒の入社一年目。就職試験の面接時にも、その他要望ということで、祇園祭期間中の休暇を要望。面接官から、採用後の赴任先で調整して、と言われ、休みが取れるとニコニコに。それが、勝手な思い込みだった。

赴任先は、入社後の五月に新規オープンした横浜の店舗。新入社員研修を終えたばかりで、〝今〟の仕事を覚えるのに精いっぱいなのに……。ボーナス需要やお中元シーズンでもあり、六月後半から忙しい毎日。そんな中での七月の休暇申請……。確か、この年は金曜が町内神輿、土曜が御饌米奉納。仕事の状況や店舗の営業を考えれば当然〝出勤〟。今年は祇園祭の参加は我慢して、仕事に専念！　と、祇園祭期間中を全部仕事に……。忙しく、走りながら仕事する毎日を過ごし、あっという間に七月二六日。今日から祇園祭が始まるなあー、なんて時々思いながら、せっせと仕事。

そして、夜八時の閉店・終業を迎え……。突然、タモリさん出演の某番組ではないが、花火の音。それも何発もの音。空耳？　横浜で花火大会がある話も聞いていないし……。お店の外に出てみたが、花火は上がっていない。だけど、自分には花火の音が聞こえる！　花火が打ちあがっている！　腕時計を見たら午後八時過ぎ…、これはきっと直江津の花火の音！　祇園囃子とともに、夜空に舞う直江津の花火の音！　祇園祭が始まった！　祇園祭がやってきた！

今から思えば、横浜の街の騒音が響き渡った音なのかもしれない。だけど、確かに花火の音が聞こえた。

直江津に帰りたい！　祇園祭に出たい！　町内の方々と楽しみたい！　そんな思いが強烈になり、とうとう店長に二八日から三〇日まで三日間の休暇を懇願。店長は当時の新井市出身の方と知ってはいたが、祇園祭のことも知っていたとは。〝ラッキー〟だった。

お盆と正月の休暇を返上することを条件に三日間の休暇がＯＫ。そして二八日。町内神輿巡行に間に合うように東京を出発。町内に合流。久しぶりの再会。それからの二日間、思いっ切り祇園祭を楽しんだ。祇園囃子を奏でた。町内の方々と大いにお酒を飲んだ。同級生たちと大いに笑った。やっぱり、祇園祭のときは仕事にならない。仕事ができない！

翌年からは新年度に入ったら、すぐ有休を申請。仕事にならないから休むことに。町内神輿巡行は三〇年連続、御饌米奉納は四〇年連続の参加に。あと一カ月で祇園祭。直江津の街が最も盛り上がる伝統の行事がやってくる。今年も仲間と、町内と、先輩たちと、後輩たちと、同級生たちと楽しみたい！

最後に…

祇園祭なくして　直江津なし　直江津なくして　祇園祭なし
我らの街直江津　最高なり　我らの祇園祭　最高なり



写真中央が丸山さん

まるやま　たけひとさん

昭和四〇年直江津市本町四丁目（四ツ屋区）生まれ。関西学院大学社会学部卒業。

東京の大手総合小売会社に入社、店長や新規事業開発。平成一〇年にＵターン。平成一三年、ＴＭＯ「なおえつ茶屋」初代店長。平成一四年再上京、大手建設・不動産会社でアウトレットモールやショッピングセンターの企画開発・運営に従事、平成二一年再Ｕターン。㈱まちづくり上越に入社。中心市街地活性化コーディネーターとして、高田地区の大型施設整備事業、高田・直江津地区の商店街活性化事業を推進。平成二六年九月から同社業務兼任で上越商工会議所に入所。現在に至る。

平成一五年、「日本一楽しい四日間」をスローガンに直江津地区連合青年会長に就任。一六年から同会顧問。

三八協（さんぱちきょう）が紙芝居を作ると



山岡太夫によって安寿と厨子王姉弟は宮崎の三郎に、母と乳母のタケが佐渡の次郎に売り分けられた郷津湾と丹後の宮津に建つ安寿と厨子王像。

三八協、三八朝市周辺まちづくり協議会（会長勝島寅一郎）は、毎月、三と八の付く日に開かれる朝市、三八朝市をまちづくりと地域活性化の中心にすえ、その周辺町内の歴史的資産を活用して活力と魅力あふれるまちづくりを目指そうと、平成一九年に結成されたもので、本町・横町・荒川町・天王町・沖見町・住吉町の六町内と中央商店街などで構成されている。

毎年、五月三日の市神祭りには、豚汁や竹の子汁の販売などを行っているが、発足以来、五基の文学碑を建てている。

最初は「奥の細道」の旅で、芭蕉が直江津今町の句会で詠んだ「文月や」の句碑を拓本が採れるように再建（もとの碑は江戸時代に建立されたが度重なる火災でひびが入っている）。引き続いて、安寿と厨子王供養塔前に森鷗外「山椒大夫」文学碑、船見公園に与謝野晶子歌碑、荒川橋畔に林扶美子「放浪記」文学碑、恵比寿稲荷神社に吉野秀雄歌碑、そして三八協が主体となって、ホテルセンチュリーイカヤ前に森光子「放浪記」二千回・国民栄誉賞受賞記念碑を上越市地域活動支援事業費の採択を受けて建立している。

安寿と厨子王の紙芝居を作成

今年一月、同会は直江地区の子どもたちに地域の伝説を知ってもらいたいと、約半年をかけ三八協独自の「安寿と厨子王」の紙芝居を作成した。

安寿と厨子王の物語として一般的に知られているものは、大正四年に森鷗外が発表した『山椒大夫』であるが、その原典は室町時代に成立したといわれる説教節の「さんせう太夫」である。

説教節とは仏教の教えを物語として語るもので、勧善懲悪・因果応報の世界を語ると言ってもよいであろう。物語の背景については本誌37号「物語に見える直江の津のかたち」を読んでいただきたいが、室町時代、直江の津あるいは直江の浦の「者」と言えば、それだけで人買いを想像させる世界が、この直江津に展開しており、都へ上る一行の運命が、人売り山岡太夫によって大きく転換することになる。





上／山岡神霊位（妙国寺・寺町）
山岡太夫の墓と伝えられ、いつごろからかオコリをしずめる神として信仰されていた。

下／安寿と厨子王の供養塔と森鷗外「山椒大夫」文学碑
供養塔は昭和29年に地元の有志によって整備されたが、河川改修によって金毘羅宮とともに数回の移転を余儀なくされ現在地に落ち着いた。ちなみに、溝口健二監督作品「山椒大夫」が、昭和29年ヴェネツィア国際映画祭で銀獅子賞を獲得している。
森鷗外「山椒大夫」文学碑は平成21年度上越市地域活動支援事業費で建立。題字と署名は津和野町森鷗外記念館。

「さんせう太夫」では、山椒大夫に下人として買い取られた安寿と厨子王は、姉は潮汲み、弟は柴刈りに使役される。姉は、このままでは父親の冤罪を晴らすこともならぬと厨子王を脱走させるが、事件が発覚すると、厨子王の逃亡先を白状させようと、安寿を山椒大夫・三郎父子は火攻め水攻めのうえ惨殺してしまう。

一方、厨子王は丹後国分寺に逃げ込み、住職の手引きで摂津国四天王寺に送られる。乞食姿に身をやつしていた厨子王は、養子探しに参篭中の梅津院に見いだされて出世を遂げる。

このように物語は、直江の浦で一行に理不尽な人生の転換を余儀なくし、厨子王は四天王寺という再生の場で、再び大きな転換に出合うのだが、鷗外の作品では、その背景については、ほとんど触れていない。

丹後の国主となった厨子王は、兄弟を使役し姉を惨殺した山椒大夫を首まで生き埋めにし、三郎に命じて竹の





四天王寺（大阪市天王寺区）
推古天皇元（593）年、聖徳太子建立とされる日本最古の寺。この地が「極楽浄土の東門」言われ、貴族から庶民まで広く信仰を集めた。聖徳太子によって医療施設や身寄りのない老人や難病の患者を収容する悲田院という社会福祉施設が開かれている。昭和 21 年に仏教のどの宗派にも属さない本来の仏教寺院として「和宗総本山」として独立。

上／西門石鳥居
彼岸に鳥居の西方（写真手前側）に夕日が沈む。厨子王も土車を降りて石鳥居につかまっていた。

下／六時堂と石舞台
説教節「しんとく丸」の舞台になっている。

鋸で首を挽かせ、三郎も生き埋めにして七日七夜、道を行きかう人たちに首を挽かせている。その後、越後へ入った厨子王は、一行を売り飛ばした山岡太夫を「簀に巻きて柴漬け」（簀巻にして海中に投込む刑）にする。

姉弟に対する長男太郎・次男次郎の密かな配慮を恩に着た厨子王は、二人に丹後国を与え、また安寿の潮汲みに気遣いをみせた小萩は、富貴の身になるよう輿に乗せて都へ上らせている。

鷗外は、「さんせう太夫」における因果応報の部分を太夫一家に対する「許し」の物語に変えている。

三八協の「安寿と厨子王」は、直江の津、山椒大夫屋敷、四天王寺という物語の大きな転換点を重視し、竹鋸の首挽きなど、今では残酷と思われる部分に配慮しながら、「さんせう太夫」の勧善懲悪・因果応報の世界を紙芝居に描いた。

カラーではないのが残念だが、誌上で再現してみた。

出来上がった紙芝居を点検する三八協のメンバー





物語のまち直江津

私たちの直江津には、直江の浦とか直江の津と言う名前で、とてもたくさんの物語が伝えられています。

源の義経の物語「義経記」や五智国分寺に伝わる琵琶法師の話、これからお話しする「安寿と厨子王」は、森鴎外作の「山椒大夫」として有名ですが、もとは「説経節さんせう太夫」という古い物語として伝えられてきました。

これほど古い物語がたくさんあるまちは、日本のなかでもあまりないといわれています。

物語の作者たちは、私たちの直江津をどのようなまちとして見ていたのでしょうか。

そんなことを考えながら、「安寿と厨子王」のお話を聞いてください。

今から千年も前、平安時代のこと

ここは奥州五十四郡の国守、岩城の判官、正氏の屋敷。

夏の始めの青空を口を大きく開けて待つヒナに、親ツバメが、せっせとエサを運んでいます。

厨子王

「母さま、あのツバメは親子でしょうか。ツバメさえ、父も母もいるのに、私たちにはどうして父さまがいないのですか」

母

「父さまは、悪い人にだまされて、いわれのない罪を着せられ、遠い筑紫の国へ送られてしまったのです」

厨子王

「母さま、それならば都へのぼって、父上の罪を晴らしましょう」

母

「そこまで思っているなら、うばたけを供に、都へのぼりましょう」



親子が都への旅を続けてひと月あまり、
ここは越後の国、直江の浦。
一行をあかあかと照らしていた夕日も落ち、あたりが急に薄暗くなってきました。
あわてたうばたけは、

うばたけ
「早く宿を探さなければなりません。奥方様、私が探してまいります」

母
「すまないねえ、たけ、お願いしますよ」

うばたけ
「〈直江の浦は、人買いが出るので、旅人を止めてはならぬ〉という御触書が出ていて、とめてくれる家がありません」



母
「なんとひどいこと」
一行が途方に暮れていると、荷物を頭に乗せた仕事帰りらしい女の人が近づいてきました。

女
「気の毒だねや、お触れが出てるすけ、どこも宿をしてくれないんだわね。この先の応化の川の橋の下で、一晩明かしたらどうかね…」

母
「ご親切に、ありがとうございます。安寿、厨子王、我慢しましょう」

厨子王
「姉さまも、私も心配いりません」

母
「おお、それは心強いことです」





この様子をそっと見ている男がいました。
昔、人を売り買いする男たちが、日本じゅうのどこにもいました。山岡太夫もその一人です。
応化の橋へ先回りした太夫は、杖でどんと、橋をつくと、
　太夫
「おーっ、橋の下の旅の人。この橋は、渡り初めの供養をしてないすけ、夜になると魔物が出て、人をさらっていくんだわ。それに、お子たちも、腹を空かせているんでないかね」
　母
「ご親切に…」
　子どもたちは、目を輝かせて親切そうな老人を見上げています。
ふと、不安になったうばたけは、
　うばたけ
「奥方様」
と、そっと奥方の着物の袖を引きました。

いかにも親切そうな顔の太夫は、
　太夫
「町はずれだすけ人目につかんし、夫婦二人暮らしで、大したもてなしもできないけも、寒さぐらいは、しのげるこて」
　太夫
「おまさんがた、どこへ行きなるんだね」
　母
「都へまいります」
　太夫
「そりゃ大変だわ、途中に親不知子不知という難所があって……」
　母
「親子でも助け合うことができない難所とか」
　太夫
「おっ、ちょうどいい、明日、丹後へ向かう船が出る」





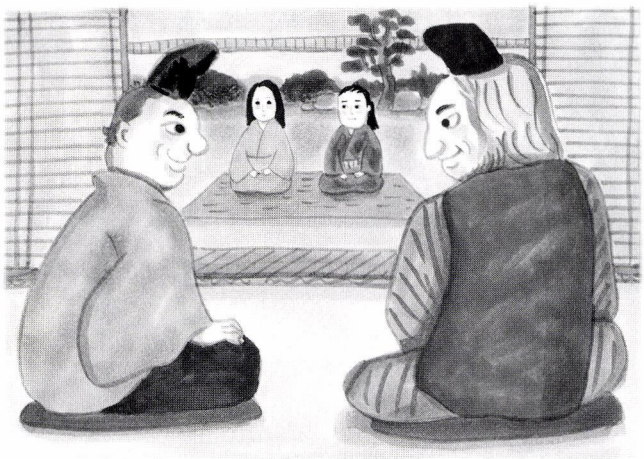
直江の浦は、
夜明け前のもやが立ち込めています。
その中を二艘の船が近づいてきました。
　太夫
「仲間の船だすけ、心配いらんわね。
奥方様と、お乳母さんは佐渡の次郎の船に、
子どもたちは宮崎の三郎の船に乗りなさい。
西の郷津の入り江に大きな船が待っているから、
そこで乗り換えるがいい」

二艘の船は、しばらく西に向かっていましたが、ふと気付くと、母とうばたけが乗った船が、少しづつ離れていきます。人買い船だと気づいた母は、
　母
「売るなら、四人一緒にしてください」
と、佐渡の次郎にすがりつきましたが、
　佐渡の次郎
「もう遅いわ」
と、はねのけられてしまいました。
母は安寿と厨子王の船に向かって、声の限り叫びました。
　母
「安寿、お守りのお地蔵様を離してはいけません。厨子王、家の由緒書きをなくしてはいけませんよー」
そして、「おかあさまー、ははうえー」と叫ぶ、二人の声は、波の音にかき消されていきました。



ここは丹後の国、由良の浜。
宮崎の三郎に買われた安寿と厨子王は、由良の浜に大きな家を持つ、山椒太夫という者に売られました。
若い二人を見た太夫は大喜びで、
太夫
「二人の名前は、なんという」
安寿は山椒太夫を見すえて、
安寿
「名前など、勝手にお付けになればよろしいでしょう」
太夫
「そうか。姉はしのぶ、弟はわすれ草だ。しのぶは毎朝、浜に出て潮を汲んで来い。わすれ草は山で、日に三荷（さんか）の柴を刈ってこい。怠けるでないぞ」





奥方と同じ船に乗ったうばたけは、船をもどすようにと、大声で叫びました。
船頭
「うるせー」
と、船頭がうばたけをつきとばすと、
うばたけ
「仏様、どうか、奥方様を、姫君を、若君を、お守りください」
と叫んで、数珠を手に、うばたけは、離れていく船の間へ、ざんぶと飛び込み、二度と姿が見えなくなってしまいました。



安寿は、厨子王を心配するあまり、
手元が滑って、
ひしゃくを波に取られては涙を流し、
桶を流しては泣く毎日でした。
そんな安寿を助けてくれたのが、
同じ下人の小萩という娘でした。

山では、厨子王も姉を心配して、
柴刈りの鎌に力が入らず、
それを見かねた親切な下人が助けてくれました。

年の暮れ、
いつになっても仕事に慣れない二人は、
ひそひそと、屋敷から逃げる相談をしていました。

二人の話を盗み聞いた太夫の三男、三郎は、
二人を太夫の屋敷へ引きずっていきました。
太夫は大変怒って、

太夫
「どこへ行っても、わしの下人だとわかるように、
額に焼印をおしてやれ」





いつものように二人で柴刈りに山へ出かけると、安寿は、人目を避けるようにして、厨子王を岩陰に引き寄せ、

安寿

「厨子王、このお地蔵様は、あなたを必ず守ってくださる。これを持ってふもとの寺に駆け込みなさい」

厨子王

「姉さまは」

安寿

「私のことはよいのです。早くしなさい！」

そして、安寿は厨子王の額に地蔵様をかざすと、不思議なことに二人の額の傷がすっかり消えていました。

正月の休みが終わったある日、安寿は、太夫の屋敷へ行き、

安寿

「太夫さま、私も弟と一緒に山仕事をさせてください」

と、願い出ました。

太夫

「山は男の仕事だ。どうしてもと言うなら、三郎、その長い髪を切ってしまえ」

それを聞くやいなや三郎は、あっという間に、安寿の髪をバッサリと切ってしまいました。



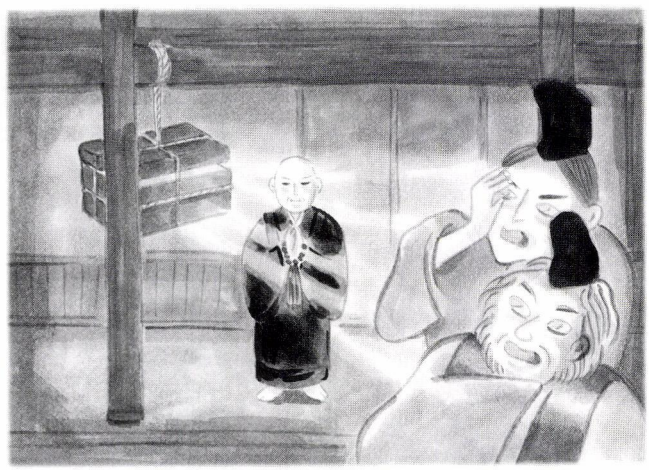


厨子王は、
首にかけたお地蔵様の袋を
しっかり握り、
姉の方をふり返り、
ふり返り転げるように
山を下って行きました。

厨子王が必死に走って駆け込んだ寺は、
丹後の国の国分寺でした。
厨子王は、住職に身の上を話して、
助けを求めました。

追手が迫っていることを知った住職は、
厨子王を皮行李に入れ、
天井につり下げました。
そして、なにくわぬ顔で、
お経を唱え始めました。



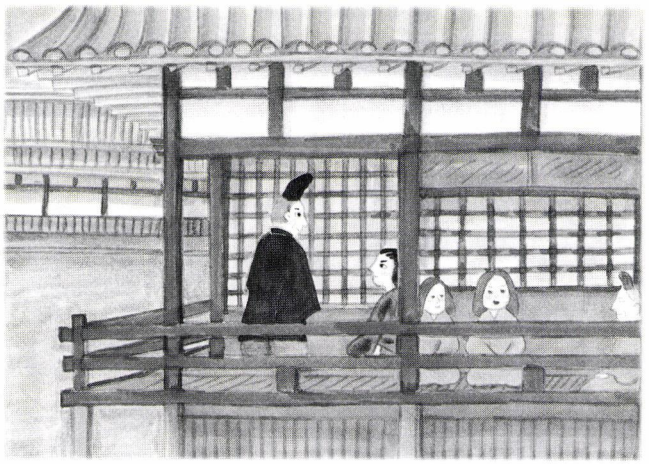


追手を追い返した住職は、厨子王の入った皮行李を背負って都へと向かいました。
都の入り口に着いた住職は、
住職
「厨子王、かわいそうだがここからは
一人で都へ入りなさい」
と、丹後の国へ帰っていきました。

しかし、厨子王は、何日も皮行李に入っていたので、足腰が立たなくなり、歩けませんでした。
かわいそうに思った人たちは、
厨子王を土車に乗せて、
村から村へと摂津の国、
四天王寺まで届けてくれました。



厨子王が逃げたことを知った山椒太夫は、三郎や下人を引き連れて国分寺を取り囲み、厨子王を差し出すよう迫りました。
三郎が天井の皮行李を怪しんで、
無理やり開けようとすると、
行李のすきまから金色に輝く光があふれ、
三郎
「まぶしいー、目がくらむー」
と、太夫も三郎も、
石段を転がり落ちるようにして
命からがら逃げていきました。



御堂に座る人たちの驚く声や、笑い声にもかまわず、梅津の院は、少年を風呂に入れて、着かえさせるように家来に命じて、御堂に招き入れました。

　すると、御堂のざわめきが消え、堂内が、しーんと静まりました。

　しばらくして、堂内に

「おー」

という声がわきあがりました。

そこには、何とも言いようのない気品漂う厨子王が立っていたのです。

ここは摂津の国、四天王寺。

人びとが新しく生まれ変われる場所として、信じられていたお寺です。

梅津の院というお公家様には、あとを継ぐ子どもがありません。梅津の院は、養子にふさわしい子どもを探すために四天王寺にお参りに来ていました。

お参りの三日目、梅津の院は、御堂の片隅にうずくまる厨子王を見つけました。体は痩せこけ、着ているものはボロボロです。

しかし、梅津の院には、その少年が、まぶしい光に包まれているように見えました。





ここは越後の国、直江の浦。
厨子王は、
海に身を沈めたうばたけを弔うと、
親子を離れ離れにした山岡太夫を見つけだし
厳罰を与えました。
そして、
母が佐渡へ売られたことを知った厨子王は、
直江の浦から佐渡へ渡りました。



梅津の院の養子として成人した厨子王は、帝によって家の由緒書きが認められ、陸奥の国は、父正氏に返されました。

厨子王は丹後の国の国守になり丹後に赴くと、安寿が三郎に折檻されて死んだことを知り、嘆き悲しみ、安寿のためにお寺を立てました。
山椒太夫と三郎を探し出して厳しく罰し、何かと心配りをしてくれた太郎と次郎には、丹後の国を分け与え、小萩は、輿に乗せて都へ上らせることにしました。



厨子王
「母さま、母さまー」
母
「また、いつもの近所の子どもか、
目の不自由な者をそんなに、
からかうものではないぞ」
と、鳥追いの棒を激しく振り回しました。



あちこち、さがし回りましたが、
母の姿はどこにもありません。
疲れはてて、休んでいる厨子王の耳に、
鳥追いの声が聞こえてきました。
安寿こいしや　ほーやれほー
厨子王こいしや　ほーやれほー
安寿こいしや　ほーやれほー
厨子王こいしや　ほーやれほー
厨子王はハッとしました。
間違いなく、なつかしい母の声です。



厨子王は、振り回す棒に打たれるのもかまわず、
母を抱き寄せ、お地蔵様を母の眼に当てました。
すると、泣き疲れて見えなくなった母の目に、
ぱっと光がさし、
厨子王の顔がぼんやりと浮かんできました。

母
「おまえは、厨子王か、厨子王かぁー」

厨子王
「母さまぁ、母さまぁー」

二人はしっかりと抱き合って
再会を喜び合いました。

安寿と厨子王
説経節「さんせう太夫」に拠る
文　佐藤和夫
画　ひぐちきみよ
制作　三八朝市周辺まちづくり協議会
平成二七年度上越市地域活動支援事業費採択事業



国府――春日山――府中――直江津の空間を駆ける

特別編　湊町・直江津―安寿と厨子王フォーラム

安寿と厨子王に見る直江の津

小島幸雄

本稿は平成二八年三月、三八朝市周辺まちづくり協議会主催のフォーラムでの講演を抄録したものである。

今日は「安寿と厨子王に見る直江の津」というお話しをいたします。先ほどから、みなさんがご挨拶でもさまざまな観点からお話しになられていますし、後に紙芝居もあります。また、直江津図書館にも多様な山椒大夫に関する本があります。『古典文学大系』には説教節の山椒太夫「さんせう太夫」ですね。そういう本をぜひお読みいただきたいと思います。今回は、山椒大夫ではなく、物語にも描かれた直江津を「海と山」という視点で、地勢と文化動態を見てみたいと思います。

出会い

私が山椒太夫に出会ったのは、森鴎外の『山椒太夫』でした。鴎外に随分、傾倒した時代があります。彼は森林太郎という名で、中学生の頃、手紙に小島林太郎と書いていたくらいでして、破り捨てられたこともありました。私だと分からず、ずいぶんお叱りを受けたこともございました。それぐらい傾倒した時期もあったのです。

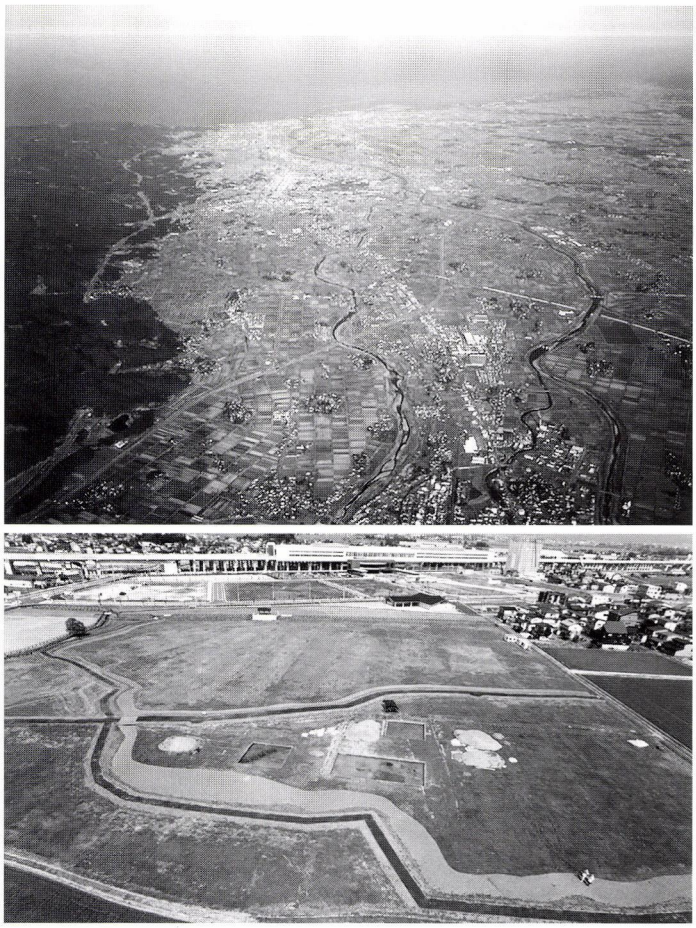
地域の財産を生かす

さて、ちょうど五年前の平成二三年三月、上越市は「歴史文化基本構想」を策定いたしました。上越教育大学の川村知行先生を委員長に、考古学者の岡村道雄さんも入っていただき、私も参加させていただきました。その中にはっきり書いてあるのです。報告書の第四章、構想とその実現に向けての目指す将来像は―地域の人が自分の言葉で地域の歴史文化を語ることができる―こととされています。委員会では、これを「歴史文化基本構想」の目標値として定めたわけです。

歴史文化基本構想を策定する時、事務局でリーダーとなった方が一番前にいらっしゃる中西聰さんです。現在の文化行政課長さんです。横にいらっしゃる北越出版の佐藤さんとお会いして三五年ぐらい、先の川村先生とお会いすると同時に中西さんも仲間に加わって三〇年弱、その間、ずっと考えてきたことが構想そのものなのです。みなさんが紙芝居を作り、直江津橋のレリーフの拓本

を採り、『山椒大夫』という歴史的な文化史的な財産を通して、直江津という所を全国に発信している。まさに基本構想の―地域の人が自分の言葉で地域の歴史文化を語ることができる―を実際にやっていらっしゃる。ですから本来、私が話さなければならないことをみなさんの中で理解され根付いているわけです。

なぜ最初にこのようなことをお話ししたかというと、今日の結論そのものなのです。直江津をどんな所として捉えたらいいのだろうか。紙芝居や拓本の製作から地域の歴史文化を見る。そして、それを財産として後世に伝えていくため、直江津あるいは頸城が持っている歴史性をお話して、皆さんの財産に少しでも肉付けできたらいいな、というのが私の気持ちです。



上写真A　下写真B

歴史の必然

写真Aは、妙高市（新井）の上空から撮った頸城の平野です。この写真については最後にお話ししますが、私たちが住んでいる頸城の地勢を構成する要素は「海」、「北陸」と「東北」、「信州」であり、そこに人の流れがうまれ、物の流れが交差する場所となり、文化の渦巻く場所となるのです。一方通行の人の流れは全く無い。いつ撮影されたかは定かではありませんが、真ん中あたりに現在は新幹線が走っています。頸城に入って頸城から出ていく。ちょうどこの地域が東西日本の中で重要な位置を占めている。偶然ここに新幹線が建設され駅ができたのではありません。必然性があって上越妙高駅ができたのです。歴史は必然なのです。

写真Bは上越妙高駅の西口です。西口から三分で釜蓋遺跡です。写真の上に横たわる建物が新幹線、それから関田山脈です。手前の帯状に見えるのが環濠で、弥生時代後期から古墳時代の始めぐらい、一八〇〇年くらい前の遺跡です。

写真Bの上方の駅前にあるのが、釜蓋遺跡ガイダンスというところです。「小島節」で、くびきを熱く語らせてください。

交流と影響

妙高市との堺に稲荷というところがあります。山麓線でいくと川が無いのに橋が架かっています。その下にある吹上という遺跡です。

次ページの写真Cの1は小松式という石川県の小松市辺りで出てくる土器です。2は飯山とか長野の土器ですね。3が東海地方で、4は近畿地方の特色が見られる土器とされています。5・6の黒っぽいのが長野の方の土器です。色白が北陸、色の黒っぽい〈土器〉が長野と

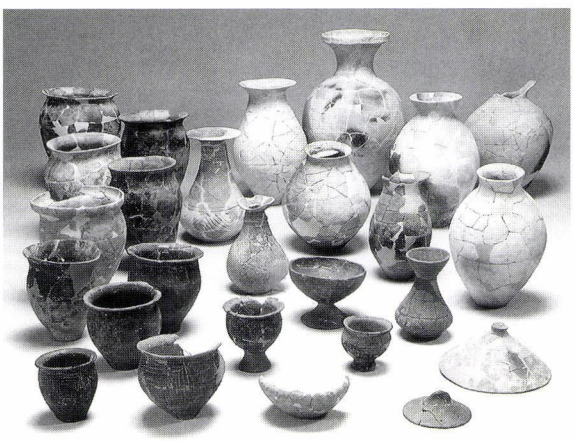
考えてください。

写真Dは二一〇〇から二〇〇〇年ぐらい前ですね。右側の白っぽいのが全て北陸の土器で、左側の黒っぽいのが長野の土器ですね。

写真Eは去年、大騒ぎになりましたが淡路島で銅鐸が出ました。1は銅鐸を真似た、2も銅鐸を真似たもの、3は銅戈（どうか）という武器を真似たもの、このようなものはこの辺にはどこにもない、と思っていました。ところが平成一二年に出たのです。出土したときはビックリしましたし、富山や長野を含めてこの辺のどこにも無かったから、どこから来たのだろうって大騒ぎをしたんです。そうしたら数年後、長野県の中野市で出てきたのです。えっ中野に？　そっくりです。これは土ですが、中野は本物ですから銅ですね。だからそういうものが入ってくる下地があるのですね。新幹線で長野からすぐですね。それから北陸からも近い。こういったものがどんどん入ってくるのが頸城だということなのです。



写真C


写真D

話は少し古くなりますが、写真Fは約四五〇〇年前の土器です。すべて上越教育大学の敷地になっている山屋敷I遺跡から出土したものです。この土器を影響の強い地域別に分類すると、北陸・信州・信濃川中流域・東北などと分類されてしまうのです。

つまり上越名物（？）って何だろうってことなのです。実は、この中に「Made in 上越」を探せといっても無いのです。上越市の発掘に三〇年、富山で二年、辞めて九年たっていますから、上越の土器に携わって三九年、このような色や形の土器を見てきましたが、土器が出ると、これはどこの土器、これはあそこの土器と分けるのです。分けないとくっつけられないのです。色の違い、模様の違い、材料の粘土の違い、石の違いと分けていくと、「これこそ上越」っていうのが見つからない。言い換えれば、「上越らしさ」を特定できないことが上越の特徴だと思えるようになりました。



写真E



写真F

境界性とは

これは最後に申し上げますが、片鱗を申し上げておくと、よく境界都市といいます。特に直江津は「境界性を持っていて」なんてよく言いますが、文化に境界なんて無いというのが結論です。直江津のどこに境界を引くの、直江津の境界ってどこだ、東北の境界と北陸の境界？どこで引くの？　引けないじゃないですか。境界とは、人間が仮に設定したものであって、グレーなゾーンが暗黙の了解で設定されているのです。こういう土器をずっと見てきて、一時、境界性というものをお話ししたこともあります。確かに地域的に考えると境界というものはあるのだろうけれど、文化に境界なんか無いのじゃないか。いろんな地域からの影響をたっぷり享受して微妙に変化しているのが、直江津の一番良いところじゃないかなと思うようにもなりました。

それでは、この地域の特色が出た土器はどれ？　と問われても、誰も答えられません。『上越市史』は一〇年間費やしましたが、各地の研究者に「上越の土器ってどれですか」ってよく聞きました。答えは、長野の人は長野の土器を分類して、北陸の人は北陸の土器を分類して、信濃川流域の人は信濃川、みんな自分のテリトリーの土器を持っていきます。そうするとですね、そこに残っているものは無いのです。それくらい上越の土器というのは、あらゆる地域から持ち込まれた「よう」なのです。持ち込まれたとは申しません。絶対この辺で作っているはずなのです。ここで作っているのですが、みんなそれぞれ格好が違うのです。長野の方の人がどういう土を使うかというと、火山性の粘土を使うのです。火山性の粘土を使うと中に鉄分が入っていますから焼くと赤くなる。長野の人は赤い方が好きなのです。だから、どちらかというと新井の方の粘土を使うと赤い土器ができます。

北陸の土器は白っぽいような感じがみられます。北陸の白い土器はどこの粘土を使うかというと、いわゆる五智の土のように海底隆起をした粘土は焼くと、白っぽい焼き色になります。長野の人は火山性の粘土を使うので赤っぽい。一点だけ毛色の変わった土器（Fの1）があります。恐らく長岡辺りの粘土を使って長岡で焼かれたものをお嫁（？）に来た時に担いできたのではないか、と言われるぐらい向うに良く似たものです。

絵図の世界

写真G・Hは慶長二年の国絵図です。慶長二年となっていますが、私の友人の鶴見大学教授の伊藤正義君が、これは文禄に描かれたものだろうとよく言います。なぜかと申しますと、太閤秀吉が全国統一して太閤検地を行います。検知を行ってどこにどれだけの石高があるかを調べて、それを地図に残していった。だから文禄絵図が



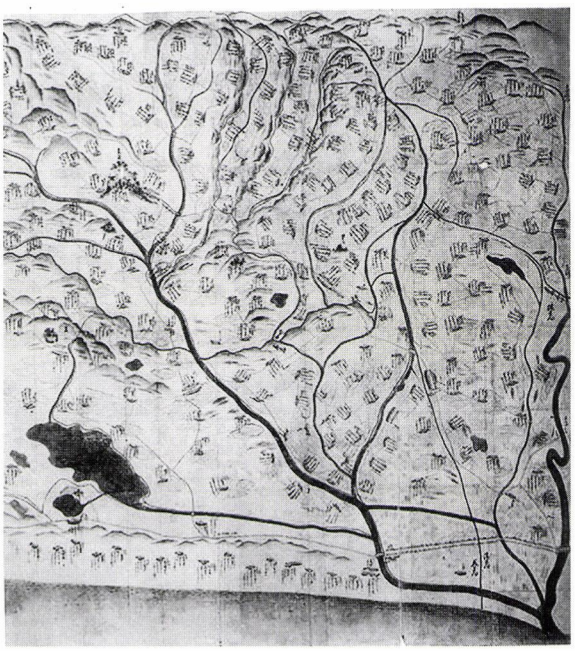
写真G

正しいのだと、酒を呑むとよく言っていました。

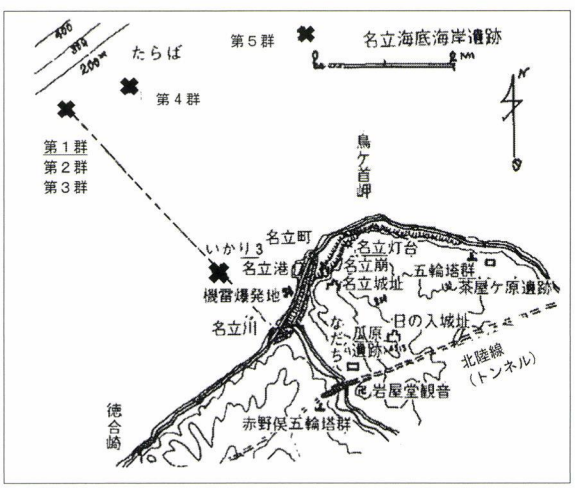
見にくいのですが、橋があって、黒くなっているところにそこに川の名が書いてあります。今の関川です。大きく曲がっているところが大曲ですから、市役所と対岸がリージョンになります。この絵図は頸城郡の関川よりも東側しか残っていないのです。越後府中と春日山が無い。残っていたら……。なにも残っていないから、みんなで議論して考え、楽しんでいる、というのが現実です。

「山椒大夫」の船はどこから出た

さて、「山椒太夫」の直江の浦の場面では、この応化の橋なのかそれとも……、川の西側の絵図が無いので言いようがないのですが、関川の河口から入っていくと、橋の近くにもう一本、西側に行く川があるはずです。よくご存じの御館川です。この御館川が、越後府中にとって、とても重要な川だと思っています。その大事な川が描いていないので困ってしまうのですが、本来は川があったはずです。



写真H



写真Ⅰ

正善寺川は、ご存知のように上越教育大学の北側を横切って高速道路の脇を通って木田へ出てきますが、あれは後で掘った川で、御館という館の横に流れているから御館川と今は呼んでおりますが、かつての川は正善寺川だったと思います。したがって、ここに沢山の水が集まります。当時は正善寺ダムはありませんから、谷愛宕の愛宕池という灌漑用水もありません。ですから雨は川に入れば、そのまま直江津へ集まって来るわけで、相当の水量だったと思われます。そうだとすれば、船も御館川から関川の本流に出てきたと考えたほうが妥当だと考えられます。安寿と厨子王の一行が小舟に乗せられたのは、関川ではなく御館川ではないかなと、実は思っているのですが、残念ながら絵図に川がないので、これ以上のことは申し上げられないのです。

沈船と焼き物

写真Ⅰは、名立の沖合で焼物を引き揚げた位置図です。室岡博先生が漁師さんから聞き取って記録したもので、

×印は沈船の位置を示しています。

なぜ船が沈んでいるところが分かるかというと、底引き網に焼き物が引っかかるのです。

写真Jは、能登半島の珠洲市周辺で焼かれた中世の焼き物です。一一五〇年ぐらいから一五〇〇年過ぎまで焼かれていた焼き物で珠洲焼といいます。ブツブツ、ゴミが付いているように見えるのはフジツボです。これは大甕です。フジツボが付いていないのもありますが、フジツボは砂の中に生息しませんから、泥の中に埋まっていたものです。

この近くで一番上がるのが、名立の鳥が首の約五kmの、水深二〇〇mぐらいのところで、底引き網に引っかかります。能生の弁天岩の沖合にもあります。それから名立の沖合。谷浜を過ぎて直江津のあたりはほとんど揚がっていません。恐らく底引き網をしないからでしょう。有間川や直江津の漁港には底引き網をする大型の漁船はないですね。新潟県沿岸では、寺泊沖がすごいです。名立から寺泊になぜ多いかというと、能登半島と佐渡が屏風となって、その境目を北西の風が入ってくるからだと思います。ただし、もう一つ考慮しなければいけないのが姫川と関川です。この谷から出てくる川は、火吹きだけのように南風を引き込みます。上越は春先に南風が吹きます。問題なのは、南風では海は荒れないのですが、風が沖合に到達すると北西の偏西風と一緒になって、一変して東向きの風に変わります。そこを後ろから煽られた船が沈没するのが名立沖と寺泊沖だと思われます。



写真J

能登半島の先端で焼かれたもの。なぜ、海からたくさん揚がって来るかというと、鎌倉・室町時代の船は、地回りという港と港をつなぐ船で、輪島、珠洲、七尾、氷見、伏木、魚津へ寄って能生とか有間川へと来て、越後府中へ来るのです。

だから名立沖に沈んでいる船は、能生で荷物を入れ替え、もう少しで越後府中へ入ろうかという時、後ろからあおられて沈んだ船なのです。上越と糸魚川は南風が吹きますが、能生や名立は南風が吹かないのです。背後に山を背負っているからです。

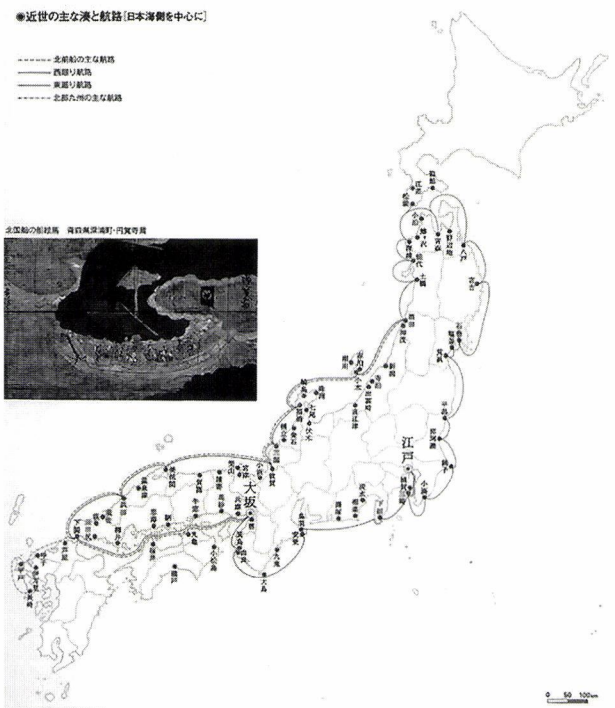
次ページ写真Kは「入れ子」になって沈んでいた焼物です。上越市の博物館に所蔵されています。室岡博先生が名立小の校長先生でおられた頃に調査され、博物館の開館に際して漁師さんからご協力いただいて展示されたと聞いています。こんなに沢山の焼き物を入れ子にした例は知りません。「UMIAGARI—海揚がり—日本海に沈んだ陶磁器」という展覧会が長岡の歴史博物館で開催されましたが、この展覧会の説明では、海の神さまを静めるために海に落としたとありましたが、入れ子にしたものを海に投げ入れるなど考えられません。海の神さまにお供えするのであれば、積荷の焼き物の一番立派



写真K



写真L



写真M（「初期伊万里展」図録より）

なものを投入するでしょう。

船とバラスト

佐渡市小木の宿根木に小さな二mぐらいのすごく綺麗な川があって天然の鮎が上がります。そこに掛かっている橋は御影石です（すべてではありませんが）。広島県の尾道から運ばれたものだそうです。酒田や新潟から大阪に米を運んだ西回り航路の船が北上するとき、船が転覆しないようにバラストとして船に積み込まれ、小木で売られたのでしょう。

それでは直江津にはないのか？　写真Lは五智の国分寺さんです。国分寺さんの参道にたくさん見ることができるのです。本堂から親鸞聖人の大きな像のほうに向かうと、竹之内草庵。あそこに敷いてある石畳がその証です。お天気の良い日に見ると青い石が敷いてあります。笏谷石といいます。福井県の足羽山というところで採れる石です。ぜひ、ご覧いただきたいと思います。

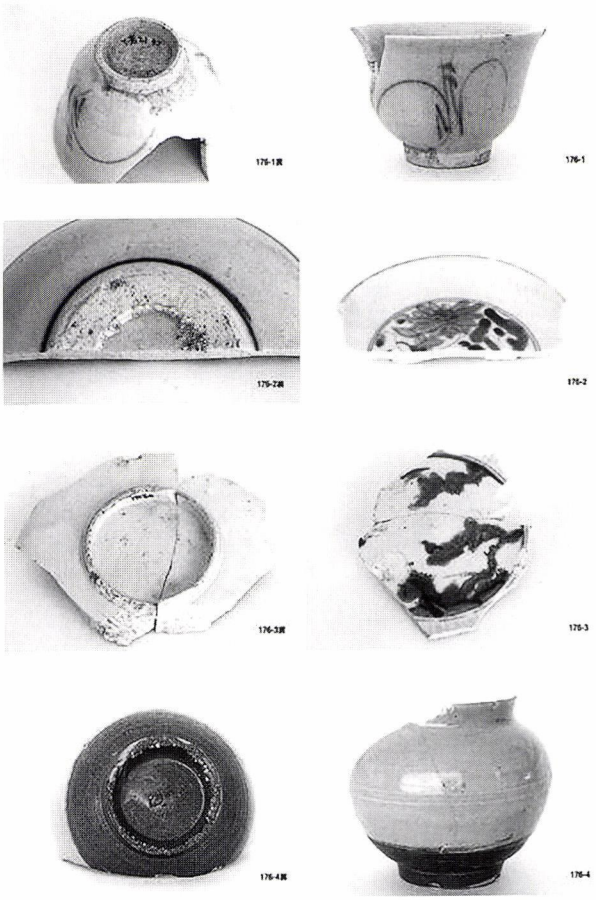
余談ですが、三重塔は県の文化財です。全国で一〇〇いくつある三重の塔の中でも未完成の珍しいものです。二十四孝の掘り物が中に保管されています。一階から三階までの四面の窓にはめ込む予定です。各層の回り縁に立っている高欄も横の手すりがない。最初は「未完成のものは文化財に指定できない」とされ、二回目では「未完成なんて珍しいじゃないか」ということで文化財になった変わり種です。ぜひ、大切にしてください。

バラスト―その二―

写真Mは北前船の航路です。いわゆる官営航路、西回り航路ということです。酒田から出て新潟、新潟から佐渡へ、能登半島の福浦に寄ったら三国港や敦賀のほうまで一気に行ってしまうのです。こういうでっかい船ができるのが今から五五〇年ぐらい前、一四五〇年ぐらいです。上杉謙信が生まれる前。この航路ができることによって、能登半島の港に寄港しないで半島を回る航路が

できたのです。今までは、先ほど申し上げたように各地の港を地回りで寄港しながら航行していたものが、直江津や富山湾の港に寄らないで日本海を行き来するようになります。

しかしこれはあくまでも幕府が定めた航路で、実際には港がなくなったわけではありません。鉄道やトラックがない時代には海上輸送が大量輸送の唯一の方法でしたから、能登半島を一気に航行できる船があっても、直江津が航路から外れても直江津にはたくさんの船の出入りがあったことでしょう。直江津になぜ船がたくさん入ってきたのかというと、沿岸を回る船は無くなっていないということなのです。回船問屋があったことは皆さんもよくご存知でしょうし、私の生まれた能生にもたくさんあります。それはみんな地回りの船で、いわゆる、図のように限られた港に寄港するだけの官営航路だけではなかったのです。



写真N（「初期伊万里展」図録より）

写真Nは、高田城から出土している初期の伊万里です。なぜ初期の伊万里が出るかというと、大型船が必要な港に寄港する時代です。直江津に入ってこなくてもいいのです。直江津から物を出した船が積荷を下ろし、帰る航海のためにバラストとしてまた焼き物を積む。この中に伊万里が入っていたのです。バラストは、その土地に無いさまざまな品物を招来することとなったのです。伊万里や唐津などの焼き物。笏谷石・御影石など各地の特産の石材、これらの重量物がバラストとして使用され、日本海沿岸の各地に運ばれたのです。北海道の松前まで及んでいたことが知られています。

瀬戸物と唐津物

最後に、瀬戸物と唐津物というお話しです。みなさんは、焼き物のことを「唐津」といいますか？。唐津って名前で器を表現しているのは、私の知りうる範囲では、七尾、高岡辺りが限界です。富山はもう言わないそうです。それから能生は全く言いません。直江津には唐津屋っていうお店があったようです。それから中西さんのお話で、高田に唐津屋っていう食堂がありました。元は瀬戸物屋さんで、その瀬戸物屋さんが「唐津屋」といっていたそうです。唐津屋は瀬戸物屋のことだったのです。

唐津屋と言う瀬戸物屋の名前は越中の国府から越後府中まで飛んでいるのです。その間にはどうも無いのです。確認のため七尾市の学芸員に聞きましたら、知らないと言われました。え？　知らない？　で、発掘中というので、周りのおじいちゃん、おばあちゃんに聞いていただいたら、「それは瀬戸物屋のことだ！」って言いきっていました。若い世代になると、もう分からないのです。

なぜ、こんなことを言うかというと、少し昔のことを伝えてほしいということなのです。今が限界だと思うの

です。

今ならまだ伝えられる。しかし、一〇年、二〇年たったら全くわからない世界になって行くのでしょうね。博物館の展示物に…。瀬戸物と唐津物ということだけでなく、あるところで箱膳の話をしたら、笑われましたけれど、そういう世界が歴然とあった。そういうところに戻れとはいいませんが、どうやって伝えていくかということだと思います。

境界都市の実像

「境界都市の実像」なんて、カッコイイことを書きましたけれど、境界なんてものは人間が勝手に決めた線です。これは人間が勝手にそこを結界として、何か意味を持たせたものなのですね。でも文化としては、そんな結界は無いと思います。両方、というよりあらゆる隣接する他地域から、混然一体となってやってくる。今日のキーワードはニュース。N・E・W・S。北から東から西から南から色々な文化の伝播があって、はじめて物ができあがる。その典型的なのがこの土地だと思うようになりました。決して、どこかに影響されているとかじゃないと思います。長野からの波がある時代、北陸から押し寄せる時代、決してどこかのものではないのだけれど、大きな流れとしてはあちらこちらから入っています。一つの文化動態ではなくて、色々な文化をどこからでも受け入れる。

結局、自分の文化とは何かってことは、難しい。直江津、上越、頸城の文化って何かといわれたら、こんなに分かりにくい所はないです。でも、その分かり難さこそがこの土地を語る、一番大切な要素だと思います。

（上越市専門学芸員）



日本海から見る郷津湾

番外編

歴史は「今日」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

やさしく解説
いまさら聞けない
真田の歴史

上越信金と業務提携している上田信金の皆さんが制作したパンフレットを抜粋してご紹介します。

【其の壱　真田家のルーツ】

真田家の祖は東信濃の豪族、海野氏であると言われていますが、応永七（一四〇〇）年、信濃守護職小笠原氏と北信濃・東信濃の豪族連合が戦った大塔合戦で、連合軍の中に「実田」と名乗る土豪がいました。これが「真田」であると考えられています。

上田市真田町のあたりを本拠地とした土豪が「真田氏」を名乗り、徐々に勢力を拡大していったというのが定説のようで、戦国時代の初めころ「真田幸隆」と名乗る人物が真田の郷を支配し、真田幸隆・昌幸・幸村の「真田三代」、そして現在に至る「真田の歴史」が始まります。

【其の弐　真田幸隆の時代】

真田幸隆（幸綱）は、永正一〇（一五一三）年に海野氏の一族として生まれたと言われています。

真田の郷の北西にあった洗馬城を拠点としていましたが、徐々に勢力を拡大して真田の郷全域を支配したようです。天文一〇（一五四一）年の海野平の戦いで武田に敗れると、上杉氏が支配する上野（今の群馬県）に逃れ、真田の郷を奪回する機会をうかがっていましたが打開できず、武田信玄に仕えて真田の郷を回復しました。その後、信玄の家臣として活躍しながら領地を広げてゆきます。

幸隆、子の信綱・昌輝兄弟は、武田の「信濃先方衆」の旗頭として上田原、戸石、塩田城、川中島の戦いなど常に第一線で戦い、信玄に大変信頼されました。

天正三（一五七五）年、織田・徳川連合軍と武田が戦った長篠の戦いの前年、幸隆は六二歳で亡くなり、信綱、昌輝もこの長篠の戦いで討ち死にしたため、武田氏の家来として「武藤喜兵衛」を名乗っていた三男の昌幸が真田の家督を継ぐことになりました。

【其の参　真田昌幸の時代】

昌幸は若いころから武田信玄の側近として仕え沼田城を攻略するなど、北上州一帯まで勢力を拡大しました。天正一〇（一五八二）年三月、武田氏が滅亡すると昌幸は織田信長に従いましたが、本能寺の変の後、徳川・上杉・北条氏などが信濃の国を奪いあうなかを昌幸は真田家を守り抜き、天正一一（一五八三）年、ついに上田城



上田信用金庫年金親和会の越乃 shu ＊ kura ツアーの皆さんを歓迎する上杉おもてなし武将隊と上越信金の職員（上越妙高駅）

を築城し、小県（ちいさがた）一帯を支配しました。

天正一三（一五八五）年の第一次上田合戦（神川合戦）、慶長五（一六〇〇）年の関ケ原の合戦に向かう徳川秀忠の大軍を足止めにした第二次上田合戦と、二度にわたって徳川氏の大軍を破った真田氏は、その存在を天下に知らしめました。しかし関ヶ原の合戦は徳川方が勝利し、昌幸と次男の幸村（信繁）は、高野山麓の九度山（くどやま）に幽閉され、昌幸は慶長一六（一六一一年）年、失意のうちに六五歳の生涯を閉じました。

【其の四　真田幸村の時代】

慶長一九（一六一四）年の大坂冬の陣では、真田幸村（信繁）は豊臣方の求めに応じて九度山を抜け出し参戦します。この時、真田軍は鎧を赤で統一したため、「真田の赤備え」と言われました。

幸村は、大坂城三の丸の南側、玉造口（たまつくりぐち）外に三日月形の出城「真田丸」を築き、徳川勢を苦しめます。冬の陣後、家康は幸村に領土を与え、繰り返し味方になるよう使者を送りましたが、幸村は断固として断り豊臣家に忠誠を尽くしました。

慶長二〇（一六一五）年の大坂夏の陣でも、幸村率いる真田勢は勇猛果敢に戦い、徳川勢を大いに苦しめましたが、「真田丸」はすでに取り壊され、圧倒的な徳川勢の前に力尽き、四九歳の波乱の生涯を閉じました。

幸村は敵陣めがけて突入する勇敢な人物とされていますが、兄の信之は「穏やかで辛抱強く、物静かで怒ることのない性格」と評しています。大坂の陣で戦った豊臣・徳川の敵味方どちらからも「勇猛で最後まで豊臣家に忠誠を貫いた名将」であったと称えています。

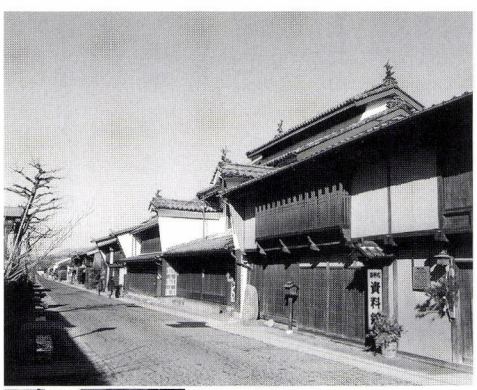
幸村の次男でただひとり生き残った片倉守信は、後に陸奥仙台藩士となり仙台真田家を起こしています。

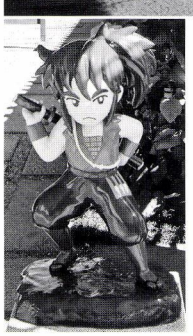
【其の五　その後の真田氏】

真田信之は、関ヶ原の合戦でも大坂の陣でも徳川方に付いて上田城とその領地を守りましたが、元和八（一六二二）年、松代と沼田の領地を与えられて転封となりました。その時、上田城の大きな石垣石を父の形見として運び出そうとしたところ、あまりの大きさに運び出せなかったといわれています。これが東虎口櫓門の脇にある直径三メートルの「真田石」です。

その後、沼田は長男の信吉が治め、松代は次男の信政が治めましたが、沼田真田家はお家騒動などで改易。松代真田家は二五〇年、一〇代の藩主が北信濃四郡を治め、戊辰戦争では新政府軍の一員として戦い、版籍奉還後は藩知事、明治二四年に伯爵となって今日に至っています。

幸村という名前で広く知られていますが、「真田信繁」が本当の名前で、「幸村」は江戸時代の軍記物語などで使われるようになり一般的になったようです。猿飛佐助、霧陰才蔵などの「真田十勇士」もモデルの人物はいるようですが、講談などで語られた架空の人物です。





上／真田幸隆の故郷、海野宿
左／上田のまちを守る真田十勇士のフィギア

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

NHK「真田幸村」が好調です。その中で「上杉景勝」が登場すると心の中で〝待ってました〟と嬉しくなってしまいます。

いよいよ水族館の工事が始まりました。

二年後のオープンに向けて長野へ、群馬へ、県央の長岡方面へとアピールし、今から来客を地元の〝賑わい〟に結びつける策を考えておかなければなりません。

二年は長くなく、短い時間ですよ。

（梅田）

目次

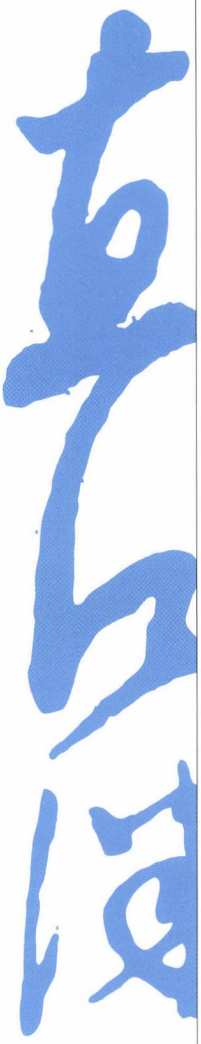
特集　三八協が紙芝居を作ると　4
国府―春日山―府中―直江津の空間を駆ける
特別編　安寿と厨子王に見る直江の津
上越市専門学芸員小島幸雄　20
巻頭エッセイ・
直江津＝直江津祇園祭　丸山岳人　2
歴史は「今日」への手紙
いまさら聞けない真田の歴史　29

「直江の津」
第一三巻一号　通巻三八号
発行日／平成二八年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2016・1号

直江の津

発行／平成二十八年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円